

「生誕 100 年 清宮質文」の楽しみ方をいろいろな人に聞く「清宮質文」の歩き方 ③

今回は対話鑑賞イベントおしゃべりミュージアム！&ノートでおしゃべりミュージアム！から。



《失題》(ガラス絵)

「失題？無題じゃないの？」(たくさんの方から)

…私も無題かと思ったら、ご所蔵の方に「失題です」と教えていただきました。いつも発表前に題をつけていた清宮さん。元の題を想像したくなります。(学芸員)



《夕日と猫》



《夢の中へ》

「モデルの猫ちゃんの名前の由来は？」(みどり市の猫好きさん)

…《夕日と猫》のカヤ、《夢の中へ》のキナヒロのことですね？
飼い猫ではなく通い猫。清宮さんはたくさんの通い猫をかわいがって
いました。カヤはアトリエの名「沙艸居(さそうきょ)」の由来で、
清宮さんが大好きで机に飾っていた「カヤツリグサ」からでしょうか。
キナヒロは清宮邸に一番長く通ったキナコの連れ子だからです。

「清宮さんを知るためのおすすめの本は？」(ノートから)

…『清宮質文全版画集』(玲風書房)がおすすめ！会期中当館ショップにて販売しています(学芸員)

「絵で詩を書く清宮さんが、どういう詩を描きたかったか、わくわくしながら見ました」(ノートから)

…「わくわくすっぞ〜」というセリフ入りのイラストありがとうございます！(学芸員)

「暗い気分になりました。上の方のイラストで明るい気分になりました」(ノートから)

「”暗いなあ”という印象でした。でもシュールで面白かったし、なんだかいやされました。」(ノートから)

…私も悲しみを感ずります。清宮さんは親交のあったご所蔵者に「晴れやかな気分にはなれない」といったそう。



《ある空間(蝶)》

けれどご所蔵者も《ある空間(蝶)》の空に、希望を見ているそうですよ。(学芸員)



《さまよう蝶(何処へー夢の中)》

「蝶ははかなげだけれど、空間に惹かれる。希望が感じられます。」(版画家、広沢仁さん)

「孤独が深くとも、死を近く思っても、希望は故にあるのだと感ずります。」(ノートから)

「悲しみを感ずっても大丈夫。ろうそくの灯や夕焼けのオレンジの明るさがあるよ、とっているよう」(ノートから)



《雨後の貯水池》

…原色でなく中間色が多いのはなぜだと思いますか？(学芸員)

「目にみえない空気を描くためでしょうか。」(版画家、木村真由美さん)

「色に気持ちを込めるから、幅を持たせたかったのでは？」(造形作家、横山宇加さん)

…紙+色+色…と重ねて一つの色を出す版画。だから日によって、人によって、見える色が違うのかも。清宮さんは「緑を出すのが難しい」とっていたそうです。(学芸員)

「現実のひかりに、記憶のひかりを溶かすほのあかるさによって、色を見ていた方なのかなあ…」(ノートから)

「作品を覗いていると幼い頃の記憶が蘇ってきて不思議でした。」(ノートから)

「旧約聖書詩篇を読んだ清宮氏へ、イエス様はきっとみ手をさしのべていたのでしょうか？」(ノートから)

…クリスチャンではないけれど旧約聖書詩篇に惹かれていました。作品集『暗い夕日』の主題です。(学芸員)



《トンネルの出口(『暗い夕日』3)》…左を最初に制作して、右に直しています。(学芸員)

「最初は出口を背にこちらをみていて、次のは出口に向かってこちらにふりかえっている。」(Sさん)

「彼方からみつめ返されるような、遠くへ行ってしまった感情が返ってくるような。その感情のもとへ自分が行けるような、ふしぎな静かな気持ちです。」(ノートから)

…《窓のランタン》《窓のカンテラ『暗い夕日』6》では、窓の内から外へとまなざしが変わります。(学芸員)



「身を引いて客観視するため？」(版画家、木村真由美さん)

…内と外が、そのままあの世とこの世のような。(学芸員)

《窓のランタン》

《窓のカンテラ『暗い夕日』6》

「モノタイプに色が無いのは何で？」(女性)



…かたちを自然に借りながら、色に気持ちを込めていたのが、かたちにも自由に気持ちを込められるようになって、色がいらなくなったのかも。(学芸員)

《失題》(モノタイプ)



《西の空》(ガラス絵)



《北の窓》(ガラス絵)

「北の窓はほかのガラス絵と違って燭台がはっきり描かれて印象的。火が消えてるのが気になる。」(Yさん)

「西の空の夕日はひとつじゃない？横にならんでいるのは何ですか？」(女性)

…アトリエの窓からでしょうか。季節で変わる入日を記録した一枚のスケッチを思い出しました。(学芸員)



「晩年になるにつれ自由に、透明になっています。」(水彩画家、新井いづみさん)

「もう何もかたちがない。空気だけ。光だけです。」(版画家、木村真由美さん)

…腕を磨くのは想いを描くため、想いを描くのは伝えたいから。でも自由になるほど、悲しみや寂しさが絵に現われてしまうのかもしれない。(学芸員)

《無題(未完)(絶筆水彩)》

「木村忠太展おしゃべりミュージアムでも思いましたが、他の人のお話をうかがうのはとても楽しいです。」

(水彩画家、新井いづみさん)

…みなさんまたぜひご参加ください！(学芸員)